

さまざまな銃器の種類を知るための入門編

銃器や銃の専門用語の世界は非常に広く、ある銃と他の銃の違いを知ることは困難な場合がある。銃器は何世紀もの歴史の中で多くの分類方法があるが、最も簡単な方法は、装填と発射の方法で区別することである。

火縄銃（別名アークウィバス）は、15 世紀から 17 世紀にかけて使用された手持ち式の銃器の主流であった。マスケット銃は**銃口装填式（前装式）**で、推進剤（火薬）と発射体（鉄砲玉）を銃口の中に入れ、ラムロッドと呼ばれる長い道具を使って発射口に詰め込む。火薬は、バネ仕掛けのアームに取り付けられた、ゆっくりと燃える火縄で点火される。引き金を引くとアームが前に出て、火のついた縄を火薬に接触させ、銃を発射する。この発射装置を**火縄式**という。

西洋では、火縄銃は 17 世紀末には使われなくなった。その後、火薬の着火に火縄ではなく火花を使う**ホイーロック式**や **フリントロック式**、さらに 1 世紀後には自己着火式の**雷管式**が使われるようになった。前装銃はやがて、より早く、使いやすい**後装**（銃身後部の開口部から装填する）**銃**に取って代わられた。

日本では火縄銃が廃れることはなく、1600 年代から 1700 年代にかけて鉄砲職人によって改良が加えられた。徳川時代（1603～1867 年）、日本は鎖国をしていたので、銃口装填式の火縄銃がそのまま使われた。19 世紀になり、日本が開国して初めて、より近代的な武器の輸入と製造が始まった。